

SPD 三十年の歴史

はじめに

SPD という用語が日本に紹介されて約 30 年が経ちました。主に医療材料の物流管理手法として、SPD（医療材料等の物流管理）という言葉が使われ始めてから 20 年以上が経過しています。外部委託業務としての SPD は拡大し、医療安全、トレーサビリティの観点からも今や SPD 業務は病院経営にとっては不可欠のものとなり、その必要性・重要性が認識されるようになってきました。

1999 年 3 月に「SPD 業務の質の向上を通して医療の向上に貢献する」を目的に「継続これ力なり」をモットーに、医療業界の横断的な任意団体として SPD 研究会を発足させ、19 年にわたり活動してきました。

この度、SPD 研究会を発展的に解消し、一般社団法人医療製品物流管理協議会（略称：SPD 協議会）として法人化することを契機に、『SPD 読本』を出版する運びとなりました。医療に係わる行政、医療機関、医療産業界の皆様には、「分かりにくい」、「難しい」と言われてきた SPD をできるだけ易しく説明し、皆様に正確な理解と共通認識を持っていただくために、ぜひお読みいただきたく存じます。

本書は、SPD 業務の実施を通して、SPD 業者の視点から、日頃、言いにくい医療機関、医師・病院経営者の皆様に、苦言や、病院にはこのようにあってほしいとの要望を含め、述べています。また、本書は、日常の仕事等の参考になればとの思いで、医療製品の物流管理を説明・解説する「読物」であり、学術書ではありません。学術的な研究・分析が求められる点多々ありますが、この点は、今後の研究者・識者の研究に委ねることにしたいと思います。

本書は篠原出版新社発行のイザイ「SPD の将来シリーズ」、学研メディカル秀潤社発行の『医療安全とトレーサビリティ』の執筆者に、新たな執筆者を加え、各種の講演・プレゼン資料や SPD 各社がビジネスに使用しているプレゼン資料を基に、加筆、修正・編集したものです。

本書が実務を遂行するために役立ち、医療機関はじめ医療周辺産業に従事する方々に SPD を通じて、外部業務委託に関する認識を高めて頂くための参考になることを、切に願っています。

(参考資料)

SPD および SPD 研究会を初めて医療機器業界に紹介するために、日本医科器械商工団体連合会の機関誌 (Mic's 1999 SUMMER) に掲載された一文である。

SPD 研究会の発足

— 横断的組織作りへの試み —

株式会社メイ・ケア情報研究所 代表取締役 笠原 庸介



■業務の正当な対価を確立させよう

SPD (Supply Processing and Distribution) 方式による医療材料の物流管理効率化の手法が日本に導入されてから、7～8年が経過した現在、病院自主運営あるいは外部委託にて定数管理を実施している病院は、約500施設以上と推計されています。実施病院では、器材購入額の軽減、不良在庫一掃、看護婦の負担軽減など一応の効果が上がっているが、DRG/PPSの導入に伴い、コスト意識の向上と原価管理の徹底をなお一層推し進めることが望まれ、実施病院の間でもSPD方式の導入気運が益々広がっています。

一方、管理サービスを提供する側の状況を見ると、一部のソフト提供会社を除き、ほとんどの業者が赤字に苦しんでおり、燃滞たる状況にあるといっても過言ではないでしょう。

得喪先を失うから撤退したくてもできない、黒字転換の妙案・自勉も無い。又これから始めるにも採算を考えると躊躇せざるをえないなど、まさに「やるべきかやらないべきか」皆が「ハムレットの心境」になっています。シェア拡大を狙ったサービスの無償提供、何ら根拠の無い1床当たり2,000円のサービス料など、赤字の理由を挙げつらうことはできますが、情報・認識不足による足の引っ張り合い、サービスの安請合い等、自らが得た種が赤字の主たる要因と言えるでしょう。

問題は、物品価格と管理サービス業務対価を分離させるかです。対価の分離、業務のすみ分けができれば、業種・業者間の共存・共生が可能と考えます。このままでは、収益性のないSPD業務は、「業」として成り立ちません。如何にしてサービス業務の正当な対価を病院に認めてもらい、業界全体で努力していく必要があると思います。

■業種を超えた意見交換、研究、交流の場を持つ

SPD業務に関わる業者は、日医器連に加入している医療器具販売業者・製造業者をはじめ医薬品卸業者、減価代行業者、医療事務代行業者、商社、及びシステム・ソフト会社など多業種にわたり、SPD業務取組みの目的が異なるため、組織的な会合・集まりを持つことが難しく、交流・意見交換をする場も無く、競争相手の顔も分からない状態にありました。

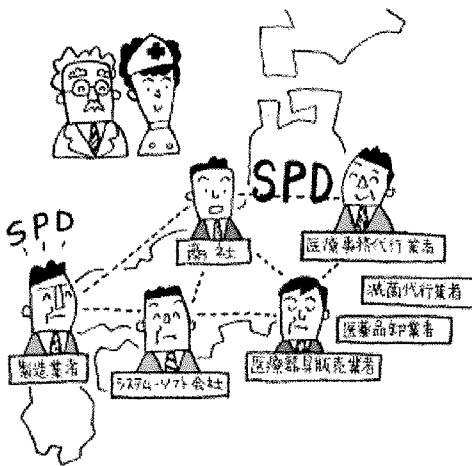
現状打開の糸口として、業種を超えた意見交換・研究・交流の機会・場があればとの声に答へ、当社が世話役となり、松本日医器連会長はじめ関係者の助言を頂き、今年の2月初旬に(仮称)SPD研究会開催を約60数社に呼びかけたところ、東北から九州までの約30社から問合せがあり、うち21社が参加し、3月17日第1回研究会の開催に漕ぎ着けました。その後、第2回 5月25日(参加27社、テーマ「SPD業務の無償提供と公正税制の解釈」講

師：今野医備用具業公正取引協議会事務局長)、第3回 7月13日(参加25社、テーマ「2000年間調とシステム保守」講師：川越情報システム、「医事請求とのリンク」講師：日本医療事務センター)を開催、有意義な会を持つことができました。

■参加者の熱意で継続させよう

第3回目からは、会員組織(入会金1万円、法人年会費5万円、個人年会費3万円)とし、趣旨：「SPD業務の質の向上を通して、業界の発展に寄与する」。会員参加資格を、幅広い参加を頂くために「趣旨に賛同する法人・個人」としました。会員登録数は、99年7月現在で26社。参加の心構えとしては、「一人一言型とし、積極的に議論に参加する。人の話だけを聞きに来るのではダメよ!自分が困っていること、やっていることを出来るだけ具体的に話し、助言を受ける。ノウハウに係わる面も可能な限り、開示するなど、ギブ・アンド・テイクの精神で!」などです。

念のため、研究会は顔合の場ではありません。SPD業務に関連する諸事項・問題点を討議、研究し、業務のレベルアップを図り、病院にSPD業務の正当な価値・対価を認めてもらう点等に努めます。業種・事業参入目的が異なるものが横断的な団体を継続維持していくことは、ある種の困難が伴いますが、困難の克服と地道な努力・布石が次の時代を造ります。研究会の継続と存在価値は、参加者一人一人の熱意にかかっていると云えましょう。「継続は力なり」。



SPD 読本 目 次

推薦文

落合慈之先生／松本謙一会長

はじめに SPD 三十年の歴史 2

序 文 4

第 I 編 SPD とは何か 11

1章 SPD とは 12

(1) SPD の定義 12

(2) SPD 発展の経緯・参入業者 14

(3) SPD の目的 16

(4) SPD 運用の基本と物品の分類 19

(5) SPD 運用形態 23

2章 委託業務としての SPD 39

(1) アウトソーシングとしての SPD 39

(2) 業務委受託（請負）と労働者派遣 46

(3) 業務委託対価と業務別契約分離 48

(4) SPD と公正競争規約 53

3章 物流管理システム 55

(1) 物流管理システムと病院情報システム 55

(2) マスタメンテナンス 59

第 II 編 SPD 導入でなにが変わるか 73

1章 標準コードと医療安全・トレーサビリティ 74

標準コード、標準コード化のメリット 74

2章 手術室における SPD 85

(1) 手術室での物品管理 85

(2) セット化・キット化 85

(3) 原価管理 88

(4) その他 89

3章 SPD 導入の効果 90

(1) 看護部における導入効果 90

(2) 期待経済効果試算のシミュレーション 94

4章 データ分析と経営支援 102

医療材料のデータ分析とマネジメント 102

5章 備蓄在庫と災害時対策 109

備蓄在庫調査アンケート－災害時対策の提案－（「イザイ誌」再掲）

第 III 編 SPD の実際と将来像 123

1章 SPD 実施病院事例と標準コードの活用 124

(1) 先進事例から学ぶ－京都第二赤十字病院の場合－ 124

(2) 『育成』と『継続』の相関関係－聖隷が資材の直営を続ける理由－ 132

(3) 医療機器販売業者の院外 SPD センターの運営－富木医療器(株)の場合－ 141

(4) 鋼製器具と滅菌管理－サクラシステムプランニングの場合－ 146

(5) 鋼製器具のデータマトリックス管理－魚沼基幹病院の場合－ 153

(6) 医薬品 SPD について 161

2章 SPD の将来像 166

(1) 医療材料の電子商取引（EDI） 166

(2) SPD の将来像（運用管理部門としての SPD） 172

3章 共同購入 177

国の政策と共同購入の関係 177

あとがき 188

あとがき

日本 SPD 協議会設立を契機に一念発起したとはいえ、本当に書籍として出版できるのか、読者対象者はだれか、SPD に興味があり読んで下さる人はどのぐらいいるのか、など多くの不安材料を抱えながら、いささか無謀な出版計画であったと、今さらながら思っております。とはいえ、お陰様で、関係各位の多大な御支援、ご協力をいただき、なんとかゴールまで漕ぎ着けることができたことは、望外の喜びです。同時に、SPD に関心のあるかたには、「まずは本書を入門書としてお読みいただきたい」とお願いできるようになり、「SPD とは何か」を説明する煩わしさから解放されるであろうと、安堵しているところです。

「はじめに」で、本書は「日常の仕事等の参考になればとの思いで、医療製品の物流管理を説明・解説する『読物』であり、学術書ではありません」と述べました。その通り、学術的な書籍としては、矛盾点、説明不足の面も多々あり、ご批判もあろうかと存じます。あくまでも「SPD 入門」の取っ掛かりとして、ご活用いただくことを願っています。

病院に対する要求・苦言が随所にみられます。SPD 事業者の立場を擁護するトーンが強くなっているかと思えます。さらには、「質が悪く、ロクな仕事もしていないのに何をいっているか」との声が聞こえてきそうで、反省点も多く、申し訳ないばかりです。これも弱い立場の SPD 事業者が、SPD 業務の理解と発展、病院経営の健全化、医療の質の向上を願う思いの強さの顕れと、ご容赦いただきたくお願い申し上げます。

AI や IoT が、急速に普及する時代に突入しています。人手に頼った医療製品の細かな物品管理手法は時代遅れで、非効率的であるとの印象を抱かれる読者も多いと思えます。しかしながら人手に頼っているとはいえ、昨今の人手不足に拘わらず、最低賃金に満たない労務対価（例：300 床規模病院、SPD 業務（手術室支援業務含む）月額 30 万円、など）で SPD 業務委託契約が結ばれている現実があります。この問題を解決するのが喫緊の課題と認識しています。

日本の医療は、固有の医療政策に基づく世界に誇れる国民皆保険制度、診療報酬制度等により、高い医療レベルを維持していますが、一方では少子高齢化、国民医療費の高騰など、多くの問題を抱えています。医療法や診療報酬制度の改正、規制緩和を行えば、効率的な物品物流管理は簡単に実現できるとの意見もあります。しかし、法改正は簡単にはいかず、トレーサビリティなど医療安全がますます求められているため、一朝一夕に効率的・効果的な物品物流管理を達成することは困難です。また現状の保険制度等を継続させるには、健全な病院経営が大前提です。そのためには病院関係者のみならず、行政および製造メーカー、卸売業、小売業、サービス提供者など、医療関連業者が一体となって取り組んでいくことが必要だと考えています。

最後に本書の執筆を快くお引き受けいただいた田中聖人氏（京都第二赤十字病院・医療情報室長）、小森博達氏（横浜市立みなと赤十字病院・副院長）、山本功二氏（聖隷三方原病院・事務長）、梅澤朋子氏、山本江里香氏、山之内梨氏（魚沼基幹病院手術室・看護師）、植村康一氏、前川ふみ氏（流通システム開発センター・GS1 ヘルスケアジャパン協議会・事務局）、牧潤二氏（医療ジャーナリスト）、MD-Net の皆様、および日本 SPD 協議会の執筆担当メンバーにこの場を借りて御礼申し上げます。また、日本 SPD 協議会の事務局長として、今や身内になったとはいえ、大きな出版リスクを背負って尽力いただいた篠原出版新社の井澤泰編集長に深く感謝申し上げる次第です。

2018 年 2 月吉日

(一社) 日本医療製品物流管理協議会
理事長 笠原 庸介